三月の御教え

人間は勝手なものである。生まれる時には日柄の良し悪しも何も言わないで出て来ていながら、真ん中の時だけ何のかのと勝手なことを言って、死ぬ時には日柄も何も言わないで駆けっていってしまう。

……「天地は語る」第七十四条……

解説　この御理解は、当時、日本国中の、全ての人々に絶対視されていた日柄方位が、実は正しい学説などではなく、人間の恣意で作り上げられた迷信であることを示された教えであります。金光教祖様は「方位家や学者は日柄方位は正しいもの、守らねばならぬものと言っているが、その当人が人生において最も重要な『生まれる時』と『死ぬ時』に良き日柄方位を選ぶことが出来ずして、その途中ばかり良し悪しを言い立てるのはおかしい事ではないか」と日柄方位を観ることの矛盾を明快に言い当てておられます。教祖様のこの御教えは当時は公言することがはばかられたのですが、明治六年の政府の太陽暦採用、旧暦廃止により晴れて公言できることになったのでした。